

序

「ひそかに愚案をめぐらして、ほぼ古今^{かんが}を勘^くうるに、先師^{くでん}の口伝の真信に異なることを歎き、後学相統の疑惑あることを思ふ。」有名な歎異抄の冒頭の書き出しである。ひたすらに阿弥陀仏の本願他力を説いた親鸞聖人の没後、その教えにさまざまな異義の現れたことを歎き、弟子の唯円が切切とした願いをこめて著したという13世紀の書である。親鸞の語録と唯円自身の解説からなり、文脈は人間の賢しい解釈によって聖人の教えが間違っ^て後世に伝わることを憂えたものである。今様に考えれば、教典の解釈を巡る本流争いの話かとも見えるが、異義を排斥したり弾劾しているのではない所に真義に対する著者の深い領解^{りようげ}がある。つまり異義を唱えるものとの論争の書ではなく、あく迄も同門の中で信心^{げん}の異なることのないよう疑問をはらすために記されたものであり、「外見あるべからず。」で締めくくられている。しかし単に当事者、あるいは親鸞を信ずる者に限らず、本書に学ぶべきものは余りに多く、汎く読まれている所以でもあろう。

物事をどのように理解し、そこにどのような発見、提案ができるかその独創性、創造性に incentive を持つ研究活動にあっては、どのように他と異なるかが目的の一つである。そして既存の理論あるいはパラダイムを如何に否定し得るかに学術進歩の期待もあるわけである。したがって、それぞれ自説を主張して他の学派との論争も行なわれる事が好ましく、人間文化の向上、文明の発達という観点からすれば、異義の横行は問題に対する関心の深さを示すものとして評価される。まさに歎異ではなく歎異ということであろうか。

もっとも本書には「当時、専修念仏^{せんじゆねんぶつ}のひとと、聖道門のひと、法論をくわだてて、わが宗こそすぐれたれ、ひとの宗はおとりなりといふほどに、法敵もいできたり、謗法^{ぼうぼう}もおこる。これ、しかしながら、みづから、わが法を破謗するにあらずや。」とあり、知識に執着し学問をもって他宗と争う空しさも説かれているのである。しかし仏の身ならぬ「煩惱具足^{ぼんなんぐそく}のわれらは、いづれの行にても、生死^{しやうじ}をはなるることあるべからざるをあはれみたまひて、願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり。」ということでもあり悪あがきの末、分際を知った研究者は、最も成仏するにふさわしい悪人として救われることになるのではあるまいか。

(注、読み下し文の引用は「中西智海：歎異抄を学ぶ、講談社」による)

1988年4月

清水建設㈱技術研究所長

工学博士 太田利彦